

北海道乳幼児療育研究会 第38回研究大会

分科会1 保育

「ある親子のそだちの物語」から

あらためて自身の日々の保育・療育を振り返る

「ある親子のそだちの物語」に触れて あらためて保育者・療育者が自問すること

NPO法人にしのみさと 代表理事 柿原 勝
札幌国際大学 人文学部 心理学科 愛下 啓恵

2024.10. 6(日)

本日の分科会の大前提①

- 野島さんには、「ある親子のそだちの物語」ということでご自身のお話をしていただきました。
- 野島さんの話を聞いて、保護者の気持ちを聞いたから、現場の保育者・療育者の方に、「**今後このようにして欲しい**」というものでは決してありません。
- 保育者・療育者の方が日々様々な環境の中、悩みながら子どもたちや保護者や同僚と接していること、毎日頑張っている皆様が、さらに休日の午前中に研修に参加されている。つまり、**とっても一生懸命な方がいることを保護者の方に知って欲しい。そして一人じゃないこと、同じように、広い北海道のどこかで頑張っている仲間がいるのだということ**を再認識する場になったら…と思っています。

本日の分科会の大前提②

- 野島さんが前半お話してくださった「親子のそだちの物語」を切り口にして、保育分科会の企画メンバーで話し合い、考え、練って作成したスライドを使いこれからお話をさせていただきます。
- このスライドは、「こうしたらいいですよ！！」というそんな内容ではありません。たくさん失敗をしてきた我々の反省も含めて紹介させていただきます。
- それが後々、各々の現場に戻った際に、『視野が広がった』、『新たな視点が加わった』、『子どもへの、保護者への、上司・同僚への見方が変わった』となればとっても嬉しく思っています。
- 保育に答えはありません。マニュアルもありません。それぞれの現場で考え続けてたどり着いたものが1つの答えで、それで終わりでもない。

「見方」(＝味方)が大事かと・・・。

- この「**見方**」ができるかどうかだと改めて思う。
 - ➡ 障がいを持つ人を健常者に近づけようとするのではない。
＝保護者を前向きにさせた言葉。
 - ➡ 保護者が前向きになったのに、保育者や療育者が「**味方**」になれていませんか？
- 自分のクラスに障がいを持つ子がいた時、「え！大変ではなく」
我々も『Challenged！！』なのでは。

こどものみかた 著：柴田愛子



子どもをわかりたいために、子どもを見ることにしてきました。子どもの気持ちを察するようにしてきました。

でも、でも、無意識に子どもの気持ちより**私の気持ちで動かしていることが多い**のです。(中略)

子どもを見る、そして子どもの味方になるということは、**発達途上にある子どもの人生を応援すること**なのだと思います。

「こどものみかた春夏秋冬」柴田愛子著・福音館書店 P12より

見方が違つと、言葉掛けも変わる

《保護者同士の立ち話より》

保護者a:「もう、うちのAったら、ほんとうに落ち着きがなくて…」

保護者b:「何言っている。A君、とっても行動力があつて、素敵」

保護者b:「うちのBは、もう引っ込み思案で…」

保護者a:「そんなことない。Bちゃん慎重なのよ。それに観察力
が凄いの。この間も私の落とし物に気づいてたのよ」



A君 = 行動力と捉えれば素敵、Bちゃん = 観察力と捉えれば凄い

「寄り添う」を問い直す

- 最近、頻繁に耳にする言葉の1つ・・・「寄り添う」
- この言葉の包容力の大きさに甘えて、安易に「寄り添う」と言ってごまかしていないか？



この「**寄り添う**」は容易ではなく、**大変だし、時間も掛かるが、保育・療育ではやはり重要な**キーワードだと考える。

＜**柿原の恥ずかしい過去(過去と言えないほどつい最近)**＞

- 「寄り添う姿勢が足りてないから、寄り添い大事だから・・・」と容易ではなく、大変で時間が掛かるのに、連呼していた。

専門家としての助言のつもりが・・・

- 保育者として、療育者として、専門家という立場で、保護者へ助言を求められることがある。
- 専門家と言えども、分からないことだらけで、でも分からないとは言えない雰囲気(状況)もあり、そんな中でついつい述べたことが、「寄り添い」とは程遠い、助言や指摘になってしまい保護者をがっかりさせてしまうことになるかも・・・。

<柿原の恥ずかしい過去>

- 発音に課題があった子の保護者から、連絡帳でそのことについて質問があり、「赤ちゃん言葉ですが・・・」と書いたら、翌日「まず、赤ちゃん言葉ではありません」とだけ書かれ、そのことに触れてなかった。

省察的実践者としての援助

- わかった気になってしまうことの方がこわいことかも・・・

省察的実践者 = 学び続ける存在

- 子どもたちや保護者らに対して、ある知識を正しいこととして押しつけるのではなく、子どもたちや保護者らが自分で修正していけるように援助していく。



- 保育者自らが省察をしながら、よりよい在り方を自ら見つけ出していけるように援助していくことが大切。

保育・療育の世界ではこの姿勢は欠かせない

正しい知識

- 過去の多くの先人らが研究に研究を重ねた中で、現時点でたどり着いた1つの根拠のあるもの。
- その根拠のあるものは、新たな研究結果などによって変わることはもちろんある。
- 思いつきや経験値だけではないもの。

<柿原の恥ずかしい過去>

- 「どうして柿原先生は、幼児期は遊びが大事だと言うのですか？」と質問されて、「感覚です！！」と堂々と答えていた。

観察は、表面的なものだけではない (動きを追うだけならビデオでいい)

「私、ちゃんと〇君のことよく見ましたよ！！」

登園⇒荷物整頓⇒ブランコ⇒砂場⇒色鬼ごっこしていました



- 「でも、〇君のこと、あまりよく分らないです！！」
- 「それに、〇君だけ見ていたら、他の子のことを見逃してしまうので、不公平だったり、クラス全体がぐちゃぐちゃになってしまう気がします！！」



よく観ているのではなく、〇君の動きを追っているだけ

よく観るとは、推測や想像する眼差し

<荷物の整頓という姿1つとっても、色々と奥にあることに気づく>

①一人で場所などを理解して迷わずできている

⇒理解度の高さを再認識・まさにほめるならばこの部分！！

②友達に確認しながら行っている

⇒友達を頼りにする(できる)面がある。友達関係が見えるかも

実はまだ整理整頓を理解しきれていないという現状理解。

③分からないときに、適当なところに置いている

⇒そんな一面も持っていることを把握＝注意ではなく、愛おしくさえ感じる

理解度の弱さを把握し、**視覚(図)で示すとか方法を考えるきっかけに。**

姿を踏まえ、内面に仮説をたてる

- ○君が、ブランコをやめたのは、自分一人の力でこげないので、楽しくなかったからすぐにやめたのかもしれない…。
- ○君が砂場に移動したのは、たくさん人がいたので誰かと一緒に遊びたいと思ったのかもしれない…。
- ○君が最後、色鬼ごっこに夢中になったのは、ある保育者に、「○君、足速いね！！」と言われたからかもしれない…。



子どもたちの内面に仮説を立てる中でみえてくるものが…

偏見・先入観で、終わらせてないか

- 経験を積む中で、気をつけないと、ついつい先入観や偏見で子どもたちのことを判断してしまうことありませんか？
- 「あの子は、ADHDだから・・・」
- 「どうせ言っても、伝わらないから・・・」
- 「きっと、できないから・・・」



人は皆一人ずつ違うという当たり前のことを再認識！！

星山麻木先生の言葉『**多様なことは豊かなこと**』


保護者と保育・療育者のズレ

- 「あの保護者、なかなか自分の子どもの状態像を理解できていないよね……。無理なことさせている」といった視点で見えてしまう保育者・療育者いませんか？（多くの子どもたちと接してきた経験から、客観的な視点のつもりで）
- 「保護者は、『園では見せてないだけで、本当は不安を抱えている』と言うけど、そんなことはないよね！！」と理解。

<柿原の恥ずかしい過去>

- まさに、僕は、上記のような視点で見えちゃったり、「お母さん、園では楽しく過ごしていますよ！！」と言っていた保育者の一人でした。

全ての作業や動作は複雑なもの

- 療育現場の方は、この大変さをよく理解されているように思いますが、保育者の中には、「できて当然」「できないのは、家庭の躰の問題」という捉え方をしていませんか？
⇒その捉え方の違いで、言葉掛けも負の言葉になりがち。
- 「ちゃんと座ろうね」「こぼさないの」「ほら、集中して！！」

- 少しずつ、できるところから、段階を踏んで行うもの。
スモールステップの考え方は、あらゆる作業や動作に有効

失敗や間違いを大切にしていますか？

- 保育者や療育者は表面的には間違いや失敗を否定してないつもりでも、実は表情で子どもには伝わっていることも。
- 子どもたちは、そんな大人たちの表情やしぐさに敏感に反応する。



保育・療育者の**常日頃の意識**が問われてくる。

< 柿原の恥ずかしい過去 >

- 遊戯会で、踊りを間違えた子を見て「あ～、違う」という表情をした。その僕の表情を見逃さなかった子は「・・・」となっていた。

保育者は想像できているだろうか・・・

- 感覚過敏な子どもたちの大変さや辛さこだわりを、未だに、「わがまま」とか「行儀が悪い」と思っている人いませんか？



全く違う感覚であることを知らないいけない！！

対応や言葉掛けがズレていく。

<柿原の恥ずかしい過去(1つはつい最近なので現在です)>

- 「大丈夫、大丈夫、怖くないから」と言って、強引に連れて行く。
- 「寒いのに、手袋をしないと手がこおっちゃうよ」と嫌がるのに手袋をさせたら、手袋を脱いで投げ捨てた。その態度に腹が立ち、「物を大事にできないなら、もう手袋は買いません」と言って注意した。

『真の寄り添い』へ

- 感覚過敏の人の桁違いの感覚の違いに対して、「**おかしい**」とか、「**大丈夫だから**」ではなく、「**しんどいよね**」と共感の言葉が言えるかどうかで、大きな差が出てくると思う。
- 大空小学校元校長の木村泰子先生のある講演での言葉より「**人が人の気持ちを分けることはない**。でも学校の先生の中に、僕がクラスの子のことは一番分かっています！！」という先生がいる。それこそ、危険な意識。(ちょっと正確ではないです。すみません)



分かることはないけど、分かりたいと思う。より知りたいと、何とかしたいと思うことが大切なのでは…。【真の寄り添い】

副園長先生との出会いより

子どもの言動には必ず意味があると実際に示してくれた副園長



- 子どもの姿・行動を改めてよく観察し、その奥にあるものを想像して、言葉を掛け、接してくれる存在。
- こんな**出会いが、その人のその後の人生さえも変える**かと。
- 副園長先生の子どもの行動の見方は、「長所を探す」「良いところ探し」だと感じる。
- 子どもたちのそれぞれのよいところを見つけて、他の子へ伝えていくことは、集団で関わる保育の場ではとっても大切。

支援者との出会いの大切さ(出逢い)

33 出逢い

出逢い
うらぶらぶらとたもとたもと
どんな出逢いをも
するが
それが大事なんだ
なまあ
あつと

相田みつを美術館所蔵

療育・保育に限らず、人と人が関わる
うえでとっても大切なことだと考える。
現場の子どもたち(保護者ら)は、保
育者や療育者を選ぶことはできない
ことが多い。

だからこそ、一人の人間として、真摯
な対応を続けていくしかないのではと
思うようになった。

その子の良さを探り続けた事例①

＜鼻血がでた子がいたら一番最初に見つけるAの話＞

- Aは、様々な課題を抱えていたこともあり、クラスの他の子から「また、Aが・・・」とか、「Aがいると・・・」とマイナスな言葉を言われることが多くなっていた。その言葉に「そうじゃない！！」と反応してしまうのでAはよりクラスで孤立してしまうこともあった。
- 担任として何かないかとAの良さを探り続けるが、安易に「Aって〇〇だよね」とみんなに伝えたら、「それはZやYの方が」と言われてしまうので、観察を継続。
- クラスで鼻血が出やすい子がいた。その子の鼻血に最初に気づくのは、いつもAであることを発見。そこで、みんなにAの観察力・気づきをほめる。
- 鼻血が出た本人に、助けてくれたAのことを聞くと、「嬉しかった」とか「助かった」と言われ、Aは嬉しくなり自信をもつようになった。

その子の良さを探り続けた事例②

＜みんなから乱暴だと思われていた、Bのある日の対応を紹介した話＞

- Bは、癩癪が強く、攻撃的な面があり、年長になってもよくクラスの子らともめることが多かった。
- 言葉遣いも激しかったり、すぐに手が出てしまうこともあり、クラスの他の子らは、「Bはこわい」「Bはいや」というマイナスイメージをもっていた。
- ある日、Bがブランコに乗っている時に、園にお客さんが来て園のゲートを開ける必要があった。その際、様子を見ていると一番最初に乗っていたブランコから降りて、近づき対応していた。その後ブランコを取られていつものように怒って、揉めていた。
- その日の全体の集会で状況を説明し、Bのことをみんなにほめると、クラスのある子が、その日の降園時、「お母さん、B君、やさしいんだよ！！」とお迎えのお母さんにすぐに報告していた。

今井和子さんのエピソード(要約)より

- 今井さんが以前勤務していた保育園に、まーちゃんという2歳2カ月の子がいた。
- まーちゃんは、言葉のおくれがあり、「おーおー」と声を出していた。
- ある時、まーちゃんが滑り台の上からボールやスコップを投げ始めるようになった。
何度注意しても、強く叱っても変わらなかった。
- ある日、今井さんは改めて**その行動をよく観察した**ところ、仲良しの特定の子の時に投げていることに気づいた。
- その子たちの間では、高いところから「〇〇ちゃん」と呼び、「ヤッホー」と言い合うことが流行っていたが、まーちゃんの「おーおー」には誰も反応しなかった。
- そこで今井さんがまーちゃんに、「『僕がここにいるよ』って言いたかったの？」と聞くと首をたてに振った。そこで今井さんが仲介に入りやりとりをできるようにサポートしたら、まーちゃんは嬉しくてぴよんぴよん跳ねた。
- 次の日から、滑り台に物は持っていかず、今井先生の手を引いて登るようになった。

「母の友(No.780)・2018年5月号」(福音館書店)特集「こんなときなんていう？」今井和子さんP22-23より

園として情報共有できているか？

- 答えが「これです！！」と決まっていない保育の世界では、色々な保育観をもつ保育者がいることは、自然なことだし、よいことだと思っている。
 - 十人十色は、子どもたちだけでなく、保育者にも当てはまることだと思っている。
- ⇒保育観は様々でもよいが、園として、子どもたちの情報を共有することは必須である。情報を共有した上での対応と情報を共有していない対応とでは意味が全然違う。
- 担任任せにしないで、**園全体で見えていくという園の意識こそ＝保護者支援**になる。

連携(一緒に)の大切さ

- 家庭(保護者)だけで何とかしようとするほど、園(保育者)との関係は残念ながら悪い方へ向かう傾向に…。
- 園(保育者)だけで何とかしようとするほど、家庭(保護者)との関係は残念ながら悪い方へ向かう傾向に…。



園(保育者)と家庭(保護者)の連携(一緒に)の大切さ

- 子どもの園のみの姿を見て、「分かった気にならない」こと。
- 子どもを様々な面から見ていくことの大切さ。
- 園と保護者の関係性がよくなればなるほど、**互いのよさを認め合う**ことができ、よりよい方へ向かうことに。

「抑々(そもそも)」を踏まえる

- 苦手なことを克服する際に、好きなことをして嫌な意識・感覚を遠ざけるやり方。
- 何を大切にするのか、していききたいのか等を明確にしていくことの大切さをこの件から再認識。



- 「みんながしているから・・・」とか、「先輩に言われたので・・・」といった思考のみで判断し続けるのは要注意。
- その都度考えるということはやはり大事。

「抑々(そもそも)」をしっかりと踏まえることの大切さ！！

正論よりも、その気にさせる(のせる)

釧路の幼稚園勤務時代の心理の先生から教わったこと

- 「俗にいうイケてる先生というのは、**子どもをその気にさせるのがうまい=のせるのがうまい。**」



- 正論で、「こうしないとダメ」とか「ルールです」といって子どもにさせようとする保育者は、「うまくいきません」となりがち。
⇒「あの子、勝手に困ります」とその子を排除する考えへ。
- 「え？そのやり方おもしろーい」「先生にも教えてよ」と一度子どもをその気にさせる(のせる)保育者は、「あの子凄いな」となる。
⇒「あの子がいてくれたら、助かる」とその子も必要とする考えへ。

遊びの大切さ

- 幼児期の遊びの重要さは、平成元年の幼稚園教育要領の改訂の際に強調されたこと。
- あれから30年以上経過するが、この部分が現在の要領や指針でも土台となっていることを踏まえて、現場は保育をしていくべきかと。
- 遊びの中には、様々なものが詰まっている。
- 遊びの中で自身の興味関心があることだと、身につけやすい面が多々ある。また、楽しみながら、小さな失敗からやり直すといったことも自然とできる。

子どもが安心して過ごせるには・・・

- 子どもが大人に、拒否・要求・援助要請の3つを訴えられると**安心して過ごせる**可能性が高くなる。



保育者側(受け手側)にも問われる点

- 子どもが言いやすい雰囲気のある保育者であること。
- 言えない子どもを察知できる保育者であること。
- 言葉にできない子どももいるという想像力のある保育者であること。

<柿原の恥ずかしい過去>

- 『先生急いでいるから早く言ってねオーラ』を発散しながら、待っていた。

長所を伸ばす ⇒ 自信へ

- 『**長所のない人間はいない**』・・・佐々木正美氏の言葉
長所を発見して、いいなあと感激してやって、**そのことを子ども自身に気づかせてやる**ことで、人間はみな百点になる。

「育てたように子は育つ」相田みつを書・佐々木正美著・小学館文庫74ページより

- 廃材を使った遊びに夢中 ➡ 他のことにも良い影響
- 子どもたちの作品に対して、大人たちはどんな言葉を掛けますか？
⇒ 心からの「それいいねえ～」という言葉が子どもたちをさらに伸ばす

汐見稔幸先生の講演より①



それ(=発達障害)についてもっと勉強しなければいけないと思います。～中略～頭には知識としていっぱい持っているのだけれど、それを機械的に子どもに当てはめるような保育や教育はやらない～中略～あくまでも**子どもの事実**に則して、「**あなたは何がしたいの？**」「**あなたは何をしてほしいの？**」と聞き続ける、**ということが保育や教育の基本**だということを忘れないでほしいのです。

「発達障害の再考」著 汐見稔幸他 風鳴舎 P126より

汐見稔幸先生の講演より②【要約】

- 群馬県に作文教育を熱心に行う大野英子先生という小学校の先生がいた。50歳過ぎで初めて当時の特殊学級の担任になった。
- 字も書けない子が大勢いたが、書けるようになるはずと詩の指導をしたら、字を書けるようになり、詩をほめると子どもたちは喜んだ。
- 小学校2年生の知的障害のあるチエちゃんがぐちゃぐちゃの線を書いて「(私の詩を)読め」と持ってきた。ここで間違えたら一生書かないと思い、チエちゃんのことを思い出し、朝の様子を踏まえて読むとニコッと笑顔で喜んだ。
- その後、「字を書くか？」と言ったら4年生の頃には詩が書けるようになった。そのチエちゃんの大好きな母が病気で亡くなり、その後チエちゃんの詩はお母さんの思い出の詩ばかりになった。どれも素敵な詩だった。大野先生は、3年間書き続けたお母さんの詩をいつもほめていた。
- 中学になって、特殊学級の先生が「チエちゃん、もうそろそろお母さんのこと卒業しない？」と言ったら、その日、チエちゃんはノートと鉛筆を捨て、以後一文字も書かなくなったと同時に、発達もすべてストップしてしまった。⇒ **書く人と聞いてくれる人の共同作業**

「待つこと」の先

＜佐々木正美氏の言葉＞

- 「待つことの喜びは、日常の努力と相関する。最善を尽くしているという実感があれば、待つことの楽しみは最大になるであろう。」
- 「子どもの中の**自律性や自立性**は、**待っていてやるからこそ育つ**」
「育てたように子は育つ」相田みつを書・佐々木正美著・小学館文庫26・27ページより



決して、ただ放任して待つのではない。

主体性という名のもと、保育者が何もしないのは違うと思う。

最善を尽くすとは・・・➡子どもをよく観ることで見つかるのでは。

「あー、俺言ってた！！」 「キャー！！」どこかに逃げたくなる心境

＜柿原の恥ずかしい過去＞であり、＜恥ずかしい現在＞

- あるダウン症の子に、「見てていいよ」といかにも寄り添う感じの言葉掛けをした柿原。でも、その子の気持ちを確認するという一言がなかった。＝表面（診断名）で判断していた・・・。
- 現場3年目位の時、威圧的な言葉掛けをしていました。今振り返ると、自分では天狗になりかかっている時かも。子どものことをまとめられない他の先生を意識して、「こうやって、クラスをまとめていくのですよ！！」という偉そうな意識が働いていたかと。
- 「おやつなしです！！」と今でもいうことを聞かない我が子に頻繁に使っています・・・。（ダメだと分かっているのに使ってしまう時あり）
⇒心にゆとりない時、他の業務がある時、何度も言った後に使用

耳をふさぎ、どこかに隠れたいくなる心境

<柿原の恥ずかしい過去>であり、<恥ずかしい現在>

- 5年目の遊戯会の時に、ふざけていた子に、「だったら、もうやらなくていいです！！」と言って見せしめのようにその子を激怒したことあり。
- その子が泣いて謝ったことで、許していた。
 - ⇒遊戯会で保護者からどう思われる、他の保育者からどう評価されるか、当時はそういうところに凄く力が入っていたと思う。
 - ⇒日々その子のユニークさに何度救われたことか……。ごめんなさい。
- 我が子が家でトイレに行かないと言った後、やっぱり外出先で行くことになった時に、「なんで先に行かないの！！」とその後もネチネチ言う。
 - ⇒外出先のトイレが汚いと言ったから、余計に腹がたった。

保護者にレスパイトをすすめる意味

- 人は、助けてくれる人がいるという、心の安心が大きな支えになり、頑張れる面があると思う。
- 「依存するからダメ」「甘やかさない」といった視点で保護者に接してしまうと、不安が生まれより大きな問題(=虐待等)へ発展してしまうことも…。

<柿原の恥ずかしい過去>

- 「みんなも大変なんです。お母さんだけ特別扱いはできないです」という言い方をして助けるどころか、突き放して(突き落として)いた。

受け継がれていく

- 人は、「助け、助けられる」という中で生きている。
= 困った時は、お互い様である！！



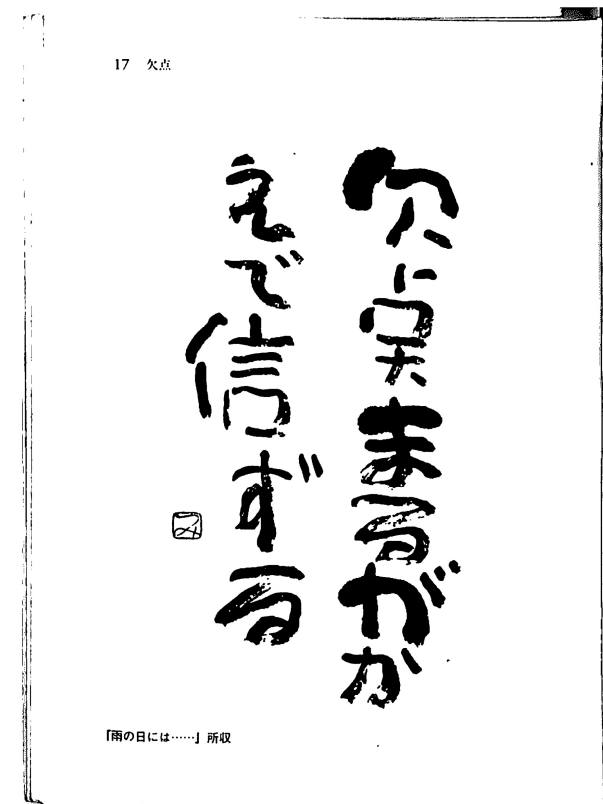
- そう思えるようになるのは、「助けてもらった」という実感があるから。



- 「自己責任」という考えが強まり、「お互い様」という意識がなくなってきた現在は、残念ながら生きづらい社会では。
- 幼少期(保育現場)で実践していくことで、社会は変わるかも・・・

温かい見守りにただただ感動

- お母様の我が子への温かい見守りに、ただただ感動。
- ↓
- 我が子を信じているからこそ、見守れる！！



分らなさに向きあうとは？

【乳幼研の大会テーマ】

- 簡単に対応方法なんて見つからないし、マニュアルなんてない。
- 他の人のやり方がうまくいくこともあるけど、残念ながらうまくいかないこともある。環境も違うし、関わる人も違うから。
- どうしてよいのか、分からないことだらけ……。



- 専門家として、正解(のようなもの)を求められるが、正直に、分からないことを伝えながら、「調べてみます」「考えてみます」という姿勢。

一緒に、共感したり、寄り添ったりしていく (Working Together)

一生懸命に、真摯に向き合う過程こそが大切なのだと思う

ネガティブ・ケイパビリティ

～精神科医・小説家でもある帚木蓬生(ははきぎほうせい)氏の言葉～

- この言葉を知ったのは、帚木氏の書籍からではなく、教育学者の汐見稔幸先生が責任編集をしている保育雑誌の『エデュカール』(2023年1月号)でした。
- この言葉の意味は、**答えが決まっていない、あるいは見つからないような不安定な状況の中にいて、そこから逃げないで、その不安定な状況をしっかりと生きる生き方**のこと。つまり、**じっくりとその問題に取り組み続けるという姿勢、それも否定的にならないで、いつか答えは見つかるような姿勢で接し続ける態度**のこと。
⇒この**粘り強さこそ、保育の専門性の要件**だと思いました。